



情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 16

2020.7

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



COCKTAIL BIKE/SHAKE BIKE

特集 グラフィックデザイン 瀬川 晃

→自作を語る／思い出の一冊／学生に薦める一冊

- 図書館を活用する
- お知らせ

特集 グラフィックデザイン

せがわ あきら 瀬川 晃

この特集では、IAMASの教員に、自著・思い出の一冊・お薦めの本などを紹介してもらいます。第16回は、瀬川晃准教授です。



→自作を語る

「カクテル自転車」、『アート・ファーマーミング記録誌』、2020年、25頁

2019年秋に2つのイベントへ参加する機会があり、赤松正行氏との共同で体験型作品を制作した。名古屋市（アート・ファーマーミング）、養老町（養老アート・ピクニック）で、自転車（移動）と食（調理）を組み合わせて新しい食体験を作れないかと構想した。リサーチにあたりヒントになったのは、ボリス・ヴィアンの小説『うたかたの日々』に登場するピアノ型カクテル製造機。演奏（鍵盤の弾き方）によって混ざる酒類が決まりカクテルが作られるもの。実際に具材の形状を考慮し、自転車の振動によりブレンダーに食材が投入されるよう検討を繰り返した。体験の流れは、参加者が食材（ベースになる液体、フルーツ、糖類、酒など）を選択し、自転車に乗る。走り方によって混入率が異なるドリンクを味わう。ナッツやフルーツ以外に養殖されたココオギのパウダーを選択肢として含めた。食材の組み合わせによって「どんな味になるのかを確かめたい」というプロセスの分かりやすさが体験するための動機となり、コミュニケーション・ツールとしての食の可能性は測り知れない。

※『記録誌』は「アート・ファーマーミング」のサイト (<https://artfarming.jp/>) からPDF版をダウンロード可能です。



Chojamachi School of Arts
/2020年

→思い出の一冊

三井康亘『アクリルロボットの工作』、NHK出版、1977年

この本を手にしたきっかけは、雑誌『太陽』の特集「ロボット大図鑑」に紹介されていたからであり、ロボットブームに夢中の小学5年生の頃だった。アクリルロボットとは、三井康亘氏が開発したアクリル板を構造として、電池とモーターで駆動するロボット。当時ロボット（のようなもの）を入手するにはキットはなく、まず作るころからというのが原体験であったように思う。六足歩行、紙製のサッカーボール、タミヤのギヤ、マブチモーター、本に掲載されていた原寸図面を元にプラカッターで切るV字の（綺麗ではない）断面、ドリルで穴を空けビスやナットを絞め、シャフトドライブ（モーターの軸）をコントローラーで操縦する快感。兄もサッカーロボットの対戦相手になってくれたが、しだいにラジコンに魅了されてしまった。アクリルロボッ



NHK出版/1977年

トはその後キットとして商品化され、ICチップが搭載されるなどブラックボックス化により徐々に興味が薄れていった。その後、2014年に再編集した『アクリルロボット工作ガイド』（オーム社）が刊行されている。作ったアクリルロボットも愛用した書籍もいつの間にか無くなったが、当時揃えたハンドドリルやブラカッターは今でも手元に残っている。

→学生に薦める一冊

ヨアキム・コーティス、エイドリアン・ゾンダーレグー

『DOUBLE TAKE 再現された世紀の一枚』、青幻舎、2018年

この写真集の表紙の印象から、写真史を代表するあまりにも有名なモノクロ写真の、画角が広がりカラーになっている違和感から、それがジオラマを撮ったものとわかるまで数秒のタイムラグがあった。まさに作者の思惑通りかもしれない。かつてのカメラがとらえていたフレームの内側、再現された写真作品として構築されるジオラマとその周りの雑然とした撮影現場との差には、二重の世界が共存している。比較するためのオリジナル写真は掲載されておらず、むしろ（再現するために必要な）フレームの外側こそが作品たらしめる証しとなっている。正解を求め（答え合わせにならないよう）記憶と照らし合わせて脳内で鑑賞する余地を残しているのか、2次元と3次元を往復する能動的な鑑賞が生まれている。表紙のモチーフになったロバート・キャパによる報道写真『崩れ落ちる兵士』は、スペイン内戦時に兵士が銃弾に当たって倒れるところを撮ったとされている。しかし撮影地、撮影者、撮影機材、兵士の身元など様々な疑惑に包まれ、いまだ真相は究明されていない。キャパの生誕100年にあたる2013年放映のドキュメンタリー番組によれば、カメラと人物の位置関係をCGによって再現する試みも行われている。関連して吉岡栄二郎『ロバート・キャパの謎』にも詳細な分析が記されている。謎が謎を呼ぶ『崩れ落ちる兵士』に限らず『DOUBLE TAKE』に収録された作品群は、時代を超えた象徴的で普遍的なアイコンであり、「どうやって撮られたのか」を写真自らが語られることを望んでいるようだ。



青幻舎／2018年

図書館を活用する その9 日本語に翻訳された本を探す

今、研究に必要な文献を読んでいるとしよう。そのなかに面白そうな引用があったとする。研究を進めるにあたってぜひ引用された本を確認したい。とくにその本が外国語から翻訳されたものの場合、どのような方法があるだろうか。今号の特集に寄稿いただいた瀬川先生の「自作を語る」のなかに、ボリス・ヴィアンの『うたかたの日々』が紹介されているので、この小説を例にとってみよう。

まずは国立国会図書館の「国会サーチ」(<https://iss.ndl.go.jp/>)や国立情報学研究所のCiNii (<https://ci.nii.ac.jp/>)で「うたかたの日々」をキーワードに検索してみる。伊東守男（早川書房）や野崎歓（光文社）が訳した『うたかたの日々』が見つかる。しかし、これだけなのだろうか。

外国語から翻訳された本は、原題に忠実な日本語タイトルがつけられることもあれば、意識されたタイトルとなることもある。古典といわれる作品であれば、明治以降、いろいろな訳者によって何度も翻訳が出版されている。1つの作品がこれまでどのような日本語のタイトルで訳されてきたかを調べるには、その作品の原題で検索することだ。原題は、例えば、国会サーチの検索結果には「注記」として「原タイトル」の記載がある。もちろん、Wikipediaなどでもわかる。ヴィアンのこの小説の場合、原題は *L'écume des jours* である。

あらためて、国会サーチもしくはCiNiiを原題 (*L'écume des jours*) で検索してみよう。すると、『うたかたの日々』のほかに、曾根元吉による『日々々の泡』（新潮社）もあることが見つかる（こちらの方が原題に忠実な訳だ）。ヴィアンの *L'écume des jours* は、3つの出版社から翻訳が出ていたのだ。

これまでみてきたように、外国語の作品には複数の翻訳がありうる。もれのない幅広い文献調査のためには、このようなことも考慮するとよいだろう。

お知らせ

→新型コロナウイルス感染症対策に伴う図書館サービスの変更

図書館では、新型コロナウイルス感染症対策のため、当面の間、一部のサービスを変更して開館しています。

- ・開館時間：月～金 12:00～19:00
- ・学外の方（卒業生を含む）の利用禁止
- ・マスクの着用、図書館入口での手指消毒の実施
- ・閲覧席、検索用端末、視聴覚ブースの利用停止

なお、貸出希望資料の事前予約や郵送サービス（送料は利用者負担）は、継続します。

■開館時間 月～木 10:15～19:00 / 金 11:15～20:00

■休館日 土曜日・日曜日・祝日、年末年始、臨時休館日（蔵書点検など）

■貸出

- 学生 20冊・3週間以内
- 卒業生 5冊（図書のみ）・2週間以内
- 学外者 2冊（図書のみ）・2週間以内

<学外の方の利用資格>

- ・岐阜県在住・在勤の高校生以上の方
 - ・東海地区大学図書館協議会加盟大学の学生
- ※自習目的のご利用はお断りいたします。



情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 附属図書館 編集・発行

〒503-0807 岐阜県大垣市今宿6丁目52番地18 ワークショップ24 1F

TEL・FAX: 0584-75-6803 URL: <https://www.iamas.ac.jp/lib/>